2015富士山バックカントリー敗退、そしてその借りを乗鞍で

2015.7.21　西部伸也

例年よりも少ない雪で、全く滑らない奇妙な雪にも遭遇したものの、天候に恵まれた美しい山の自然と仲間との楽しい山旅にすこぶる満足した2015GW東北山スキー旅であったが、その報告文の最後に記した今シーズンの締めくくりとなるバックカントリースキーがほぼ計画通り実現できた。期日は5月最終土日となる30・31日、山は富士山と乗鞍岳であった。

富士山への登山は夏も含めれば今回で8回目、バックカントリーに限れば5回目であった。最初に富士山に登ったのは1995年の3月下旬、日山協の雪上講習会の際であった。2日に亘る講習会の初日は中腹で雪上訓練後、佐藤小屋に宿泊。翌日、吉田側の山頂まで登った。登り始めは、毎月富士山に登っているという年配講師の方のペースがかなり遅いと感じたが、実はそれが正解であることを後で知らされた。最初他の人たちより速めのペースで歩いていた私は8合目あたりからすっかりバテてしまい、ほうほうの体で何とか山頂にたどり着き、昼食も全く喉を通らない有様となってしまったからである。ただ、下るにつれて何とか回復し、そしてその時の雪の斜面が、3月にしては青氷ということもなく、スキーで滑るにも面白そうだと感じていた。3月20日、下山してみると世間では大事件が起きていた。東京地下鉄サリン事件である。また、我々が中腹で雪上訓練を行っていた日には、山形県小国町からの3人パーティーが、強風で飛ばされたのか、亡くなってもいる。

2回目の富士山は翌1996年の7月。同年秋のひろしま国体を目前に控え、少年チームの強化担当であった私は、選手や他のスタッフと共に強化練習で前年開催の福島など全国の山を巡り、また他県チームの情報を入手するため各ブロック大会の視察も行っていた。そうして訪れたのが関東ブロック大会で、視察後、気晴らしを兼ねて選手や他のスタッフと共に吉田口5合目から登山したのだった。夏の晴天の下、若いスタッフの一人は海パン姿で富士登山をし、行き交うおば様たちから歓声を浴びもしていたのだったが、実はこれが大変な間違いであったことを、下山後宿舎に戻って知ることになる。全身火傷状態で満足に風呂に入れないのである。高山の紫外線には心すべしである。なお、最高点の剣ヶ峰にはこの時初めて立った。

その後10年余り富士山に出かけることはなかったが、再びバックカントリースキーに夢中になり始めた2010年から、5月のバックカントリースキーでの挑戦がしばらく続く。富士山バックカントリーの1回目は、2010年5月第3週、富士宮口5合目からであった。このシーズン、10年振りくらいに山スキー板を新調し、やや幅広でサイドカーブが大きく短め（トップ115mm・センター80mm・テール101mm、長さ163cm）のその板が、すこぶる使いやすくて山スキーを再び面白くさせてくれていたので、富士山にも挑戦してみようと思った次第である。ただし新しいのは板だけで、金具は少々古いジルブレッタ404、さらにブーツはテレマークのプラブーツという妙な組み合わせであった。（実はプラブーツはテレマーク用のものしか持っておらず、ジルブレッタ404という古い金具を新しい板に付け替えてもらったのも、それがテレマークブーツでも使用できたからである。）

最初の富士山バックカントリーの挑戦となったこの年の5月第3週、富士宮側に雪が付いていたのは6合5勺から上であった。当然スキー板は担いで登り始めた。ただしブーツは、それほど足にぴったりのきついブーツでもなかったし、アルペンブーツよりは歩きやすかったので、それを履いて土道を登って行った。雪が出てきても、富士山の斜面は割と急だったので、シールを付けて登るということはせず、スキー板を担いだまま登って行った。8合目（3220ｍ、出発点の5合目は2380ｍ）くらいまではとても快調で、そこまでは2時間10分少々で登れた。途中でアイゼンも装着したが、つぼ足のキックステップと比べてどちらが登りやすかったかは微妙なところであった。

8合目まではすこぶる快調であったが、それを過ぎると急におかしくなった。そこまでのペースがオーバーペースだったのか、あるいは前日の車の運転で疲れが残っていたのか。ともかく8合目から上は10歩進んでは立ち止まるという状況で、とうとう9合5勺、標高3550mあたりで断念してしまった。（8合～9合5勺の所要時間は2時間30分ほどで、そのうち1時間10分が休憩時間であった。）登るのをやめてもしばらくは体力が回復せず、かなりの時間休憩したのち、ようやく滑降を始めた。滑降は割と順調で、途中で1回スキーをはずして隣の雪渓に移りながら、30分ほどで6合5勺（2750ｍくらい）まで滑り降りることができた。あとはまたテレマークのプラブーツで歩いてほぼ1時間で5合目まで下ったが、そんなに苦痛ではなかった。こうして初めての富士山バックカントリー挑戦は、頂上まで達することはできなかったものの、滑りはかなり快適で、一応満足のいくものであった。

翌2011年のやはり（1学期中間テスト週間で、クラブ指導からフリーになれる）5月第3週、2回目の富士山バックカントリーに挑戦した。このときも富士宮口からを考えていた。前年のように金曜日の16時過ぎの出発ではなく、正午に広島を出発し、晩早めに富士川SAに到着して休憩、深夜には5合目まで上がる計画であった。（翌日の時間的余裕に加え、少しでも体を高度に慣らしておく意味もあった。）ところが東日本大震災の少し後に発生した富士山地域の地震による崩壊で、富士宮5合目に上がる道路は通行止めとなっていた。やむなく今回は吉田側に回ることにした。深夜1時半に富士スバルライン入口に到着すると、ゲートが開くのが午前3時であったので、それまで車の中で休みながら、3時の開門と同時に5合目を目指して車を走らせた。そうして5合目（2300ｍ）に着いて、登山支度をしながらまたしばらく休憩し、5時過ぎに登山を開始した。

この時の道具は金具もテレマーク（ケーブル式）で、板も前年のものよりはさらにファット系のもの（トップ128mm・センター90mm・テール115mm、長さは166cm）を新調し、テレマークブーツも新しいものを新調していた。（それまで使っていたものよりも滑降性能の良さそうなものを求めたのだが、その分歩きの際は少々窮屈だった。）登りのスタイルは前年と同様で、プラブーツを履き、板のみザックに取り付けて登った。この時も8合目（3040ｍ）までは順調で2時間30分少々で登れたが、そのあとからが次第にきつくなった。何とか前年の雪辱を果たしたいと思い、最後はザックもデポしてどうにか山頂（3710ｍ）に立ったが、8合目からは実に6時間近くを要していた（内、休憩の時間が約2時間30分）。降りは前年以上に快適であった。幅が1kmもあろうかと思われるような吉田大沢の大斜面を豪快に滑り、わずか10数分で7合目の下（2650ｍ）あたりまで滑り降りた。ただし、その後が大変であった。滑り降りた方向は夏の下山道よりもさらに南寄りの方向で、北方向へのトラバースとなる吉田口5合目までのプラブーツでの2時間半近くの歩きはなかなか辛かった。登りの際、スキー板にブーツも取り付けて登っている人の姿を見て、なるほどあのようなスタイルもあるのかと思っていたが、雪のない道の歩きはやはり登山靴か運動靴のものだ。

続けて2012年の5月、今度はGWに富士山に挑戦した。この時は3月まで同僚であった高田さんと2人連れであった。連休の最初（5/3）はその年夏のインターハイ会場の一つとなる神楽ヶ峰を群馬の高橋先生や愛知の岩狭さんとともに訪れ、和田小屋にも宿泊したのち、富士山に向かった（5/4）。この年のGWはあまり天気が良くなく、神楽ヶ峰は曇りあるいは小雨模様であった。富士宮口5合目に到着した日も、青空こそ見えはしたが、夜から朝方にかけてはすさまじい風が吹き、テントをばたばたさせていた。（白馬方面では栂池から白馬岳を目指していたパーティーが遭難死しているが、折しも長野・大西浩さんたちがそのパーティーを目撃している（かわらばん450号）。）天気予報から、5/5は風は次第に収まるとは思ったが、朝の出だしはまだ幾分強かった。強風で8合目までもあまりペースは上がらず（8合目までは4時間45分、うち休憩等が1時間15分）、8合目から上になると、山ではいつも私が先行するのに、この時ばかりは高田さんの後を追いかけることとなった。なんとか山頂（3710ｍ）に上がったが（8合目から2時間50分、うち休憩等が20分少々）、剣ヶ峰を目指す元気はなかった。50分ほど休憩し、ようやく滑降を開始した。登りの際はそれほどとも思わなかったけれど、9合目より上はアイスバーン状で、転倒しないよう神経を使った。それを過ぎると割と滑りやすくはなったが、途中岩や石の露出しているところもあり、まったく快適だったというわけではない。GWという早い時期で雪は5合目まで続いていたが、最後は観光客が大勢いる目の前を滑り降りることになり、少々気恥ずかしくもあった。（降りの所要時間は1時間少々。）

1年置いて2014年5月。今度は第2週、5月11日の挑戦であった。取り付きは吉田側5合目から。この年は2月に関東や山梨県で大雪が降ったこともあって残雪がずいぶんと多く、5合目までたっぷりの雪があった。朝（7時30分）、駐車場を出発する際、警備員の方から7合目から上はアイスバーンだと聞かされていたが、天候が良いので日射しで時間とともに雪も緩むだろうと判断した。また、3年前の経験から、ブーツはスキー板とともにザックに取り付けたため、他で少しでも荷物を軽くしようと軽アイゼンのみを持参した。だが、その判断は間違っていた。両ストックがピッケルのようにピックのついたものであったので、その分安心感があり、7合目以上のアイスバーンも軽アイゼンで頑張っていたが、8合目から上はさらに強風も加わり、とうとう9合目付近（3570ｍ）で断念した。体力的にはこれまでで一番余裕があったが（所要時間は5合目～8合目3時間少々、8合目～9合目3時間）、天候等の条件には勝てなかった。

9合目の小屋の屋根付近の平坦な雪面でスキーを履き、滑降に移ったが、7合目まではほぼ横滑りで、滑降の楽しさは特にはなく、頂上まで行かなくて正解だったとも思った。3年前に7合目下から5合目へのトラバースで非常に苦労していたので、今回は雪があるところで早めに北側にトラバースした。トレースもあったのでそれをたどると、観光客で賑わう5合目が眼下に見下ろせる斜面に出た。そこは北斜面ながら日射しにも照らされて、絶好のザラメ雪となっていた。観光客（その半分以上がアジア系の外国人！）で賑わう展望台のすぐ脇まで、会心の滑降であった。（横滑りとトラバースで約30分、その後10分ほどの滑降だったろうか。）登山口で、観光客がうかつに登山ルートに入らぬよう見張っている警備員の方が私の滑りを終始見ていたらしく、「うまいもんだね」と声をかけられたが、まんざらでもなかった。頂上は踏めず、アイスバーンと強風にも苦労したが、大満足の富士山バックカントリーであった。

同じ2014年の8月、神奈川県の箱根でインターハイの登山大会が開催された。大会の委員長隊に参加した私は、大会終了後どこかの山に寄って帰ろうと思っていたが、御殿場ルートで富士山に登ることに決めた。御殿場ルートにしたのは、まだ登ったことがなく、マイカー規制もなかったからである。ただ、超ロングルートなので、日帰りではなく途中で山小屋に宿泊する計画を立てた。8/12インターハイの閉会式が終わった後、13時頃から登り始めて、7合目のわらじ館に泊まる計画を立て、予約もしていた。（8/12が小屋の主人の誕生日ということで、料金が500円引きになるという幸運に恵まれたのだが…。）インターハイ期間中（8/8～8/12）箱根の天気は晴れることがなく、富士山は一度も拝めなかったのだが、閉会式の後も悪天が続き、8/12午後の富士山は雨だったので、残念ながらわらじ館はキャンセルした。御殿場口5合目の駐車場で車中泊をした翌日8/13の朝は澄んだ青空が広がっていた。8/7に箱根に来て以来、初めての晴天であった。喜び勇んで5時半前に登山を開始し、剣ヶ峰にも立って（13時前～13時半前）、16時前に無事下山した。下りの際には宝永山にも寄ったが、あたり一帯の大砂走りの斜面はある意味とても美しく、雪の時期もなかなかいいのではないかと思えた。

そのようなこともあって、5回目の富士山バックカントリーとなる2015年5月は、やはり大砂走りがある須走ルートを考えた。富士山4ルートの中で唯一登ってなく、吉田大沢をほぼまっすぐ滑降できそうなのも魅力に思えた。富士山バックカントリーは5月の第3週くらいがベストと言われるが、今年は久し振りに広島県岳連主催の比婆山スカイラン大会のスタッフを務めることに決め、また翌第4週は学校要覧作成の校務で忙しく、結局出かけたのは月末となる第5週となってしまった。

5/29(金)は5時間目まで授業があったので、それを済ませて年休を取り、帰宅後、着替えを済ませて出発。時刻は15時20分であった。その日の晩のうちに東名または新東名高速道の富士山に近いSAまたはPAまで車を走らせる予定であった（平日料金でなく深夜料金とするため、御殿場ICを出るのは5/30(土)の0時以降と決めていた）が、広島の自宅を出発した時間が少々遅すぎたようだ。23時を過ぎるとさすがに眠くなり、車を止めて仮眠することにした。静岡県の手前、愛知県の新城PA、時刻は23時10分であった。

翌日4時前に目を覚まし、4時5分に再び車を走らせ始め、須走口5合目の駐車場（標高1980ｍ）に着いたのが6時50分であった。支度を整えトイレを済ませて、7時45分に登山開始。GWのとき既に今年は雪解けが早いと感じていたが、案の定富士山も雪が非常に少なかった。御殿場ICを降りた時から雪の少なさは遠目にもわかったが、5合目付近には雪は全く残っていなかった。5月末ということもあろうが、例年以上に雪が少なかったのではなかろうか。歩き始めてからも雪はなかなか現れず、7合目を過ぎるまでは陰にいくらかの雪が残っている程度であった。板とブーツに加え、通常のアイゼンも念のためザックに入れていたため、おそらくザックの重量は18kgくらいだったと思うが、長時間歩いていると少々肩にこたえた。それで、7合目を過ぎて標高3050ｍあたりで沢筋にある程度の雪が出てきたので、シールを付けて登ることにした。富士山のシール登高は、2012年富士宮口からのトライの際にほんのわずか試してみてすぐにやめたのを除けば、今回が初めてであった。直登は無理までも、スキーアイゼンを装着してジグザグを切っていけば結構シールで登ることができた。その時の雪質にもよるだろうが、須走ルートはやや傾斜が緩いのかもしれない。シール登高に切り替え、肩もいくぶん楽にはなったのだが、山頂はなかなか近づかない。5合目を出発して8時間を過ぎた15時50分、到達点は9合目の手前、3470ｍくらいであった。ザックをデポして身軽になり何とか山頂をとも考えたが、下りの雪のない斜面の歩きのことを考えると、それ以上無理はできないと思い、断念した。

16時25分、滑降開始。一応斜面は雪で埋まってはいるのだが、雪面はやや荒れていて、滑り出しはあまり楽しい滑降ではなかった。しばらく降るとある程度滑りよい斜面にはなったが、それもつかの間で終わってしまった。標高差400ｍ程を20分少々で滑ると雪はなくなり、それからはまたスキーを担いでの長い下りが始まった。雪さえ付いていれば何のことはない斜面なのだが、実に長かった。ようやく出発点の駐車場に帰りついたのは、もう暗くなりかけた19時35分であった。

下山後は麓の温泉でゆっくり疲れをいやそうと考えていたが、時間が遅くてそれは断念した。次の日の天気がどうなるかわからなかったものの（広島を出発した5/29の予報では、5/31(日)は雨が予想されていた）、このたびの富士山の滑りで今シーズンのフィナーレを飾るにはあまりに寂しかったので、出発前に計画していた乗鞍岳にも立ち寄ることにした。そうして20時10分に須走口駐車場を出発し、中央自動車道へと車を走らせた。諏訪SA付設のお風呂で入浴ができればと期待もしたが、到着が23時を過ぎていて営業はとっくに終わっていた。富士山下山後3時間ばかり車を走らせたわけだが、さすがに疲れが押し寄せ、諏訪SAにて車中泊。

翌日再び4時前に目を覚まし、4時ちょうどに出発。松本ICで降りて、安房トンネルをくぐって岐阜県のほおのき平駐車場に着いたのが5時35分。標高2700ｍの畳平へと上がるバスの始発は6時55分であったため、それまでゆっくりと準備をした。諏訪SAで朝の天気予報を見た時には曇りのち晴れということで大変喜んだのだが、ほおのき平に着いた時にはまだ雨も降っていた。しばらくして雨はやんだが、空は依然として雲に覆われ、高い山の頂を見ることはできなかった。果たして畳平に上がってみると、霧雨模様の天気で、視界はほとんどきかなかった。ただこの日は、昼には下山して広島に帰らなければならないので、ゆっくりしているわけにはいかず、スキーをザックに取り付け、最高峰の剣ヶ峰（3026ｍ）を目指して行動を開始した（7時45分）。この日は距離は短いのでスキー靴は履いて歩き始め、一応クロックスのサンダルをザックに入れておいたのだが、このクロックスが後で大変役立った。

富士見岳の西側をトラバースしていくメインルートのトレイルに雪は残っていなかったが、摩利支天岳との鞍部（2790ｍ）から先、肩ノ小屋に向けてはトレイル上にも雪が残っており、そこからはスキーを履いた。ただすぐ先でまた雪が途切れ、いったんスキーを脱ぐが、すぐに雪が現れてまた装着。その後ももう１回そうした個所があったが、今度はトレイルを忠実にたどることはせず、大雪渓に向けていったん斜面を滑降することにした。剣ヶ峰を目指す前に多少高度を下げることにはなるが、やはり滑降は楽しい。大雪渓に降り立つと、霧は晴れ上がり、青空が見えてきた。摩利支天岳にある観測所の白いドームもよく見え、心の中で喝采をあげる。そうして振り返ると、続々と人が登っている。長野県の乗鞍高原側からバスで上がってきた人たちだ。中には山を目指すのではなく、大雪渓をゲレンデにしてスキー滑降に興じている人たちもかなりいる。畳平からの登山者は少なかったのだが、ここで一気に人が増え、「ライバル心」も出てきた。「登りで遅れをとってなるものか」と。そうして一人抜き、二人抜きして、結構な速さで朝日岳直下の雪渓最上部（2950ｍ）に到着した（9時25分）。最後は急な斜面ではあったが、シール登高はほぼ直登でいけた。斜度を考えてスキーアイゼンも装着していたが、それが役立った。

今夏の広島県高体連登山部夏山合同合宿で、上高地・穂高連峰を訪れた後、最終日午前中に畳平から乗鞍岳に立ち寄って広島に帰ることにしているため、その下見も兼ねて、スキーとザックを置いて空身で剣ヶ峰を往復した。その時活躍したのが、ザックに入れておいたクロックスであった。3000mの山でクロックスだなんて不謹慎と思われるかもしれないが、なかなか捨てたものではない。昔の人がわらじや地下足袋で山道を歩いていたのと同じだ。（剣ヶ峰を往復して再び雪渓トップに戻ってきたのが10時10分。）

さて、今シーズンのフィナーレとなるスキー滑降。前日の富士山での借りは大いに返せた。大雪渓までの標高差は300ｍほどと、前日の富士山よりむしろ少なかったが、斜面の状態が全然違い、終始快適な滑降であった。ほんの数分で大雪渓へと滑り降りたのち、摩利支天岳鞍部への登り返しがありはしたが、それでも大満足。絶好の天気に恵まれ、言うことなし。山頂から位ヶ原にかけての幾筋かの雪渓の白い帯とハイマツ帯の緑の帯とのコントラスト。遠方に広がる山並。北方向には槍ヶ岳と穂高連峰のくっきりとした姿。（先程の剣ヶ峰の山頂からは、昨秋突如として噴煙を上げ多くの犠牲者を出すことになった御嶽も間近に鎮座していた…。）山頂部一帯に点在する池もまた美しかった。朝日岳～剣ヶ峰の稜線から望んだ権現池、摩利支天岳北側の不消ヶ池、そして畳平のすぐそばにある鶴ヶ池。（摩利支天岳西方の五ノ池まで足を延ばすことはできなかったが…。）景色に見とれ、カメラのシャッターをパチパチ押していると、下山バスの時刻も迫ってきた。摩利支天岳鞍部から畳平への歩き、ここでもクロックスが大活躍し、ランニングも交えてなんとかバス出発（11時50分）の5分前に畳平に帰着。バスの車窓からの景色を楽しみながら、12時30分、ほおのき平に到着。荷物を片付け、13時ちょうどに帰路に就く。高山に出て、東海北陸・名神・中国・山陽道と走り、22時20分、無事に広島市南区の自宅に帰着した。